

## 生き方志向性の構造と生き方受容との関係 (2)

三 川 俊 樹

### The Factor Structure of Life-orientation and its Relationship with Life-acceptance (II)

Toshiki MIKAWA

#### 要 約

本研究は、三川 (2002) で作成した「生き方受容尺度」について、社会人男性のデータを基に再分析を行なって生き方受容の構造を検討し、その加齢に伴う発達的变化と「生き方志向性」との関連を考察したものである。

まず、「生き方受容尺度」の因子分析の結果から、生き方受容は、これまでの自分の生き方や人生に関する不信感 (生き方不信)、現在の生き方や人生に関する満足感 (生き方満足)、将来の生き方や人生に対する期待感 (生き方期待)、過去から将来にかけての生き方や人生における達成感 (生き方達成) の4側面から構成され、これらが過去・現在・未来という時間的展望の中で体験される生活感情であることが示唆された。

また、この「生き方受容尺度」と新たに因子構造の検討と尺度化を行なった「生き方志向性尺度」との関連を検討した結果、生き方受容は将来の生き方志向性に大きく影響するとともに、将来の生き方志向性が、これまでの生き方や人生に関する不信感を緩和したり、現在の生き方や人生に対する満足感、将来の生き方や人生に対する期待感、過去から将来にかけての生き方や人生に対する達成感をもたらすことが示され、「生きがい」の問題は、さまざまな生活領域が相互に関連しあって構成されたトータルな「生き方」との関連においてとらえることが必要であると同時に、過去から現在および未来にかけての時間的展望との関連においても検討しなければならないことが示唆された。

キーワード：生き方, 生きがい, 生き方志向性, 生き方受容, 時間的展望

## 1 問題と目的

「生きがい」の問題は、仕事における「働きがい」、趣味やレジャーでの「遊びがい」、家庭生活での「育てがい」、地域社会活動での「尽くしがい」などのように、限られた生活領域に限定してとらえるのではなく、さまざまな生活領域が相互に関連しあって構成されたトータルな「生き方」との関係において検討することが必要である。このような問題意識の下に、三川（2002）は、人生目標として個人の生き方に方向性を与える「生き方志向性」の構造と「生き方受容」の関連を検討した。すなわち、生涯キャリア発達における個人の「生き方」に関しては、価値観の表現としての活動を一つの「生き方」として捉え、「将来の人生においてそのような生き方をしたい」（生き方志向性）という視点から、さまざまな「生き方志向性」の関連とその構造を明らかにするために、尺度の開発とその検討を行った。また、「生きがい」に関しては、生き方や人生に対する充実感や肯定的評価、有能感や達成感をその暫定的な内容として、これを「生き方受容」と呼び、「生き方志向性」との関連を青年期から成人期にかけての被検者を対象に検討した。

その結果、生き方志向性には、基本的に『自己成長志向』『社会的関係志向』『創造的変化志向』『生活安定志向』『職業的評価志向』の5つの側面があることが示され、生き方志向性と生き方受容との関連については、社会人男性においてのみ密接な関連があることが示されたが、それ以外の群においてはその関連は必ずしも明確ではなかった。この結果から、将来の人生においてどのような生き方をしたいかという「生き方志向性」は、社会人男性においては、生き方や人生に対する充実感や肯定的評価、有能感や達成感に影響すると考えられたが、女性の場合には、そのような関係を示唆することはできなかった。また、社会人においては、男女ともに「仕事」や「経済的安定性」に関する生き方志向性が生き方受容には関連しないことが示され、これとは逆に、「地域社会」や「家庭生活」、「他者援助」や「社会的貢献」などの社会的関係や援助への志向性が生き方受容と関連することが示され、他者への関心の拡大や対人的援助への志向性が生き方受容に影響するものと考えられた。

ところで、先に開発した「生き方志向性尺度」の構造を検討すると、Super（1980）が生涯キャリア発達の視点から人生におけるさまざまな役割の多重性とその相互作用を役割特徴（role salience）という概念でとらえて提案した主要な5つの役割活動（学習・仕事・地域社会・家庭や家族・趣味やレジャー）が、それぞれの因子に寄与していることが示された（三川，2002）が、先の研究では、青年期および成人期の男女別にその構造を検討したのみであり、「生き方受容尺度」との関連においても、生き方志向性の25尺度との相関を検討しただけで、見いだされた生き方志向性の因子ごとにデータを集約して分析を行なってはいなかった。

また、「生き方受容尺度」については、「役割受容尺度」（三川，1990，1991）を参考に、生き方や人生に対する充実感、肯定的評価、有能感、達成感の4側面をアプリオリに設定し、各10

項目ずつの合計得点を算出してこれを生き方受容得点として用いた（三川，2002）が、「生き方受容尺度」に関しても、その因子構造をさらに検討した上で、新たな尺度構成を試みる必要があると考えられた。

さらに、ライフ・キャリアの視点からみると、役割特徴や役割受容は加齢に伴って変化する（三川，1990，1991）ことから、生き方志向性および生き方受容に関しても、その発達的变化を検討することが必要であると考えられた。

このような課題を検討するために、社会人男性のデータを用いて「生き方受容尺度」の因子構造の検討および尺度化を行ない、次いで「生き方志向性尺度」について5つの因子ごとに尺度得点を算出し、生き方受容および生き方志向性の加齢に伴う発達的变化を検討した上で、さらに2つの尺度の相関から、生き方志向性と生き方受容の関係を考察することにした。

## 2 方 法

### （1） 生き方志向性尺度・生き方受容尺度の構成

「生き方志向性尺度」は、25領域の価値観を設定し、それぞれの価値観が反映された活動を表現した項目（25下位尺度；各3項目）から構成され、これらの活動を一つの「生き方」とし、これから先の人生においてそのような「生き方」をしたいと思う程度を「ぜひそうしたいと思う」～「ほとんどそうしたいと思わない」までの6段階で評定を求めるものであった。また、「生き方受容尺度」は、生き方や人生に対する充実感・肯定的評価・有能感・達成感（4下位尺度；各10項目）から構成され、各項目が自分自身にあてはまるかどうかを「とてもよくあてはまる」～「ほとんどあてはまらない」までの5段階で評定を求めるものであった。

### （2） 調査時期・調査対象の内訳

1998年6月に大学生および社会人を対象に調査を実施したが、このうち、社会人男性295名の年齢構成は、20歳代は74名、30歳代は145名、40歳代は70名、50歳代は6名であった。そこで、各年齢段階をさらに分割し、20歳代後半（25～29歳）、30歳代前半（30～34歳）、30歳代後半（35～39歳）、40歳代前半（40～44歳）、40歳代後半以降（45歳～）の5群に分けた。

## 3 結 果 と 考 察

### （1） 「生き方受容尺度」の因子分析と尺度化および信頼性（内的整合性）の検討

社会人男性295名のデータを用いて、「生き方受容尺度」の40項目の因子分析を行なった。40項目の項目間相関に主成分法を適用して因子の抽出を行ない、Varimax回転の結果を検討したところ、4因子解のVarimax回転の結果が最も統一した解釈が可能であったので、それぞれの

因子ごとに因子負荷量の絶対値が .45 を越える項目を採択した。なお、2 因子にまたがって .45 を越える因子負荷量を示した項目は、負荷量が高い方の因子に組み込んで解釈し、項目の採択を行なった。各因子の項目内容と因子負荷量は、表 1 に示した。

この結果を見ると、生き方受容の下位尺度としてア priori に設定した生き方や人生に対する充実感、肯定的評価、有能感、達成感の 4 側面は見い出されず、かなり異なる因子構造をもつことが理解される。

まず、第 1 因子には、「\*18. 私は、今の自分の生き方が、何かまちがっているような気がす

表 1 生き方受容尺度 (40 項目) の因子分析 (回転後, N = 295)

項 目	F1	F2	F3	F4	h <sup>2</sup>
*18. 私は、今の自分の生き方が、何かまちがっているような気がする	-.73	.33	.14	-.08	.66
*23. 私は、これまでの自分の生き方を後悔している	-.73	.18	.20	-.04	.61
*32. 私は、これまでの人生において、後悔することが多かったと思う	-.73	.18	.17	-.09	.61
*38. 私は、自分の生き方に、ふと疑問を感じることもある	-.73	.23	.08	-.14	.61
*13. 私は、自分の生き方に不満を感じるが多い	-.72	.44	-.01	-.15	.73
*27. 私は、これから先の人生において、失敗するのではないかと不安になる	-.72	.08	.23	-.01	.57
*19. 私は、どう生きていったらよいのか、困ってしまうことがある	-.71	.16	.19	-.19	.60
*31. 私は、自分の生き方に自信がもてなくなることがある	-.69	.24	.20	-.20	.61
*14. 私は、つまらない人生を送っていると思う	-.66	.37	.19	-.05	.61
*26. 私は、自分の人生において、多くの時間をムダにしているように思う	-.66	.10	.05	-.09	.46
*22. 私は、自分の人生において、やりたくないことばかりさせられているように思う	-.64	.17	.13	.01	.45
*10. 私は、どんな生き方をすればよいのか、よくわからない	-.60	.18	.16	-.28	.49
*36. 私は、本当は今の人生とは違う生き方をしたかったと思う	-.58	.34	.03	-.00	.45
*9. 私は、今の自分の生き方にも足りなさを感じている	-.51	.43	-.19	-.03	.49
*29. 私は、このままの生き方で人生を終わりたいと思う	-.45	.41	-.32	.05	.47
1. 私は、自分の生き方に満足している	-.28	.79	.15	-.15	.75
2. 私は、自分の生き方が気に入っている	-.31	.78	.16	-.09	.73
12. 私は、自分の思い通りの生き方をしていると思う	-.20	.74	.08	-.19	.62
3. 私は、自分の理想とする生き方をしていると思う	-.32	.73	.11	-.12	.66
7. 私は、自分の人生を楽しんでいる	-.19	.72	.27	-.06	.63
5. 私は、自分の個性を活かした生き方をしていると思う	-.21	.69	.15	-.17	.57
21. 私は、これから先も今のような人生を送っていききたいと思う	-.34	.67	-.00	-.22	.62
17. 私は、充実した人生を送っていると思う	-.23	.68	.27	-.29	.67
33. 私は、自分らしい生き方をしていると思う	-.26	.57	.13	-.41	.57
6. 私は、自分の生き方に誇りをもっている	-.19	.56	.38	-.23	.55
37. 私は、自分の人生に生きがいを感じている	-.30	.54	.40	-.33	.64
25. 私は、幸福な人生を歩んでいると思う	-.34	.45	.22	-.19	.41
35. 私は、これから先の人生が、もっとよくなるだろうと期待している	.02	.18	.66	-.13	.49
11. 私は、これから先の人生を楽しみにしている	-.13	.34	.62	-.21	.56
*34. 私は、自分の将来の生き方など、どうでもよいことだと思う	-.25	.00	.61	.13	.45
*40. 私は、これから先の人生が、今よりもよくなることはないだろうと思う	-.45	-.10	.59	.02	.56
4. 私は、自分の人生をすばらしいものにする自信がある	-.12	.52	.57	-.20	.65
24. 私は、これから先の人生においても、かなりのことを成し遂げる自信がある	-.16	.24	.56	-.55	.69
16. 私は、こうありたいという人生の目的をはっきりと持っている	-.19	.28	.53	-.33	.50
28. 私は、これまでの人生において、さまざまな困難を乗り越えてきたと思う	-.01	.04	.05	-.78	.61
20. 私は、自分の人生において、かなりのことを達成してきたと思う	-.08	.26	-.05	-.65	.50
39. 私は、自分の人生の目標を達成する自信がある	-.14	.27	.52	-.53	.65
30. 私は、世間から見れば、成功した人生を送っていると思う	-.09	.32	.25	-.47	.39
8. 私は、自分の人生において与えられたことを積極的にこなしていける	-.21	.28	.36	-.46	.46
15. 私は、たとえ困難なことがあっても、何とかうまく生きていけるだろうと思う	-.24	.18	.38	-.40	.39
寄 与 率 (%)	19.85	18.62	10.28	8.18	56.93

\*: 逆転項目

る」[\*23. 私は、これまでの自分の生き方を後悔している]などが高い因子負荷量を示した。すなわち、自分のこれまでの生き方や人生に対する後悔や疑問、不満、自信のなさ、不安など、否定的な内容を表す項目のみで構成されており、当初は生き方受容尺度に逆転項目として組み入れた項目がこの第1因子を構成していることがわかる。このことから、第1因子を『F1. 生き方不信』と命名し、これまでの自分の生き方や人生に関する不信感を表す方向で得点化を図ることにした。

第2因子は、「1. 私は、自分の生き方に満足している」「2. 私は、自分の生き方が気に入っている」などに高い因子負荷量を示し、現在の自分の生き方や人生に対する満足感や充実感、誇りや生きがいの内容とする項目で構成されていることから、第2因子を『F2. 生き方満足』と命名し、現在の生き方や人生に関する満足感を表す方向で得点化を図ることにした。

第3因子は、「35. 私は、これから先の人生が、もっとよくなるだろうと期待している」「11. 私は、これから先の人生を楽しみにしている」などに高い因子負荷量を示し、これから先の人生や将来の生き方に対する期待、達成予期を内容とする項目から構成されるので、第3因子を『F3. 生き方期待』と命名し、将来の生き方や人生に対する期待感を表す方向で得点化を行なうことにした。

第4因子は、「28. 私は、これまでの人生において、さまざまな困難を乗り越えてきたと思う」「20. 私は、自分の人生において、かなりのことを達成してきたと思う」などに高い因子負荷量を示し、これまでの人生や生き方における達成感や人生の目標達成に対する自信を内容とする項目から構成されるので、第4因子を『F4. 生き方達成』と命名し、生き方や人生における達成感を表す方向で得点化を行なうことにした。

このようにみると、生き方受容は、これまでの自分の生き方や人生に関する不信感（生き方不信）、現在の生き方や人生に関する満足感（生き方満足）、将来の生き方や人生に対する期待感（生き方期待）、過去から将来にかけての生き方や人生における達成感（生き方達成）の4側面から構成されるものと考えられるが、これらはいずれも、過去・現在・未来という時間的展望の中で体験される生活感情であるといえる。すなわち、生き方不信は、過去から現在に至るまでの生き方や人生に対する後悔や不満から派生した自信のなさや不信感であるのに対して、生き方満足は主に現在の生き方や人生に関して体験され、また生き方期待は将来展望との関連において体験されるものであり、さらに生き方達成は、これまでの人生や生き方における達成感や、その達成感に支えられた人生の目標達成に対する有能感として体験されるのではないかと考えられる。

なお、これらの4尺度の信頼性については、295名のデータを用いて下位尺度ごとに内的整合性（ $\alpha$ 係数による）を検討し、その結果を表2に示した。「生き方達成」では、 $\alpha$ 係数が.741と他の3尺度に比較してやや低い値を示したが、項目

表2 生き方受容の内的整合性

	項目数	$\alpha$ 係数
1. 生き方不信	15	.931
2. 生き方満足	12	.938
3. 生き方期待	7	.825
4. 生き方達成	5	.741

表3 各年齢段階における「生き方受容」の平均とSDおよび分散分析

	20代後半 n=68	30代前半 n=78	30代後半 n=67	40代前半 n=38	40代後半～ n=32	分散分析 F値
1. 生き方不信	40.10 (10.65)	37.77 (10.07)	36.63 (10.49)	37.16 (10.81)	36.38 (9.78)	1.216
2. 生き方満足	36.25 ( 9.36)	36.94 ( 7.90)	36.60 ( 8.73)	35.34 ( 7.63)	37.69 (7.83)	0.396
3. 生き方期待	25.46 ( 4.27)	25.32 ( 4.21)	23.73 ( 4.59)	23.42 ( 4.13)	24.09 (3.64)	2.749 *
4. 生き方達成	15.00 ( 2.87)	14.83 ( 2.86)	14.82 ( 3.01)	14.53 ( 2.82)	15.19 (2.91)	0.267

1) \*;  $p < .05$

2) 多重比較: 有意差なし

数が5項目であることを考慮するとほぼ満足できる信頼性を有しているといえる。

### (2) 加齢に伴う生き方受容の発達の变化

各年齢段階ごとに、生き方受容尺度の4つの下位尺度(生き方不信, 生き方満足, 生き方期待, 生き方達成)の平均とSDを算出し、5群の平均の差を一元配置の分散分析によって検討した結果が表3である。

まず、「生き方不信」については、20歳代後半の平均が最も高く、30歳代前半にかけてこの得点が低くなり、40歳代後半以降では最も低かったが、分散分析の結果、5群間に有意な差は認められなかった。「生き方期待」に関しては、20歳代後半の平均が最も高く、40歳代前半にかけてこの得点が低くなり、分散分析の結果、5群間で有意な差があることが示されたが、多重比較の結果からは、年齢段階による有意差は認められなかった。なお、「生き方満足」「生き方達成」に関しては、いずれの年齢段階においても平均に有意差は認められず、加齢に伴う発達の变化はないものと考えられた。

### (3) 生き方志向性の構造の再検討と尺度化

生き方志向性の基本的構造を検討するために、「生き方志向性尺度」の25下位尺度の相関行列に因子分析(主成分法)を適用し、5因子解でvarimax回転を行った結果が表4である。三川(2002)が指摘したように、生き方志向性の構造としては、基本的に『自己成長志向』『生活安定志向』『創造的変化志向』の3因子のほか、「地域社会」「社会的貢献」「宗教」を中心に、これに「仕事」が加わった『社会的活動志向』とも呼ぶべき第4因子と、「仕事」「社会的評価」にやや高い負荷を示す『職業的評価志向』が第5因子として抽出されていたが、因子負荷量の絶対値が.50以上の尺度を中心に、2因子にまたがって.50を越える負荷量を示した尺度は因子負荷量の高い方の因子に組み入れて、あらためて次のように解釈することにした。

まず、第1因子は「能力の活用」「達成」「創造性」「自律性」のほか、「ライフ・スタイル」「責任性」「人間的成長」に、Super(1980)の指摘した5つの役割活動のうちの「学習」が加わって構成されるので、『自己成長志向』と命名した。第2因子は「健康」「ゆとり」「経済的安定性」「老後」に加えて、5つの役割活動のうちの「家庭生活」が加わった構成であるので、『生

三川：生き方志向性の構造と生き方受容との関係（2）

表4 生き方志向性尺度（25尺度）の因子分析（回転後、N=295）

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	h <sup>2</sup>
1. 能力の活用	-.83	.14	-.28	.06	-.06	.80
2. 達成	-.83	.18	-.21	.17	-.12	.81
8. 創造性	-.77	.07	-.38	.07	-.15	.77
7. 自律性	-.76	.29	-.18	.02	-.20	.73
9. ライフ・スタイル	-.74	.39	-.18	.18	-.10	.77
3. 責任性	-.71	.29	-.05	.08	-.03	.60
10. 人間的成長	-.71	.39	-.29	.07	-.08	.75
21. 学習	-.69	.20	-.21	.23	-.16	.64
6. 権威	-.61	.23	-.13	.18	-.51	.73
4. 他者援助	-.60	.21	-.25	.49	.08	.72
17. 健康	-.22	.77	-.19	.14	-.13	.71
18. ゆとり	-.32	.77	-.23	.02	-.01	.75
16. 経済的安定性	-.26	.74	-.13	-.03	-.32	.74
25. 家庭生活	-.20	.66	-.22	.15	.20	.59
20. 老後	-.19	.52	.19	.48	-.16	.60
14. 多様性	-.45	.10	-.69	.10	-.19	.73
11. 身体的活動	-.22	.30	-.68	.21	-.10	.65
13. 危険性	-.51	.05	-.68	.13	-.24	.80
24. 趣味やレジャー	-.21	.47	-.63	.01	.20	.70
15. 人間関係	-.49	.28	-.50	.28	-.08	.65
23. 地域社会	-.09	.25	-.22	.76	-.04	.69
5. 社会的貢献	-.52	.07	-.20	.68	.04	.77
19. 宗教	-.02	-.06	-.03	.67	-.24	.51
22. 仕事	-.13	-.04	-.03	.46	-.68	.70
12. 社会的評価	-.42	.27	-.33	.03	-.60	.71
寄与率（%）	27.49	14.59	11.88	10.10	6.41	70.47

活安定志向』と命名した。第3因子は「多様性」「身体的活動」「危険性」「人間関係」に、5つの役割活動のうちの「趣味やレジャー」が加わって構成される『活動・変化志向』と名づけた。第4因子は、5つの役割活動のうちの「地域社会」が最も高い負荷を示し、これに「社会的貢献」「宗教」が加わって構成される『社会的活動志向』と命名した。第5因子は、5つの役割活動のうちの「仕事」に、「社会的評価」が加わって構成される『職業的評価志向』と名づけることができた。

この結果に基づいて、各因子に含まれる尺度の得点を加算して、因子ごとの得点を算出した。

#### （4）加齢に伴う生き方志向性の発達的变化

各年齢段階ごとに、生き方志向性尺度の5つの下位尺度（自己成長志向、生活安定志向、活動・変化志向、社会的活動志向、職業的評価志向）の平均とSDを算出し、5群の平均の差を一元配置の分散分析によって検討した結果が表5である。

まず、「自己成長志向」に関しては、20歳代後半の平均が最も高く、30歳代後半で最も低くな

表5 各年齢段階における「生き方志向性」の平均とSDおよび分散分析

	20代後半 n=68	30代前半 n=78	30代後半 n=67	40代前半 n=38	40代後半～ n=32	分散分析 F値
1. 自己成長志向	149.88 (16.11)	145.45 (20.53)	140.03 (23.67)	142.53 (16.94)	141.13 (21.99)	2.359†
2. 生活安定志向	72.63 (8.18)	72.42 (10.69)	72.70 (9.91)	75.21 (7.48)	75.66 (9.32)	1.199
3. 活動・変化志向	71.18 (8.64)	67.32 (10.11)	64.73 (10.68)	64.82 (8.87)	63.19 (11.77)	5.384***
4. 社会的活動志向	28.13 (7.16)	28.76 (6.82)	28.31 (6.44)	30.47 (6.64)	31.19 (7.87)	1.658
5. 職業的評価志向	22.10 (4.88)	20.92 (5.40)	20.81 (5.30)	22.16 (5.56)	21.22 (5.38)	0.863

1) \*\*\*; p<.001, †; p<.10

2) 多重比較: 「活動・変化志向」 20代後半>>30代後半・40代後半～ (p<.01), 20代後半>40代前半 (p<.05)

り、40歳代前半でやや高くなっていることがうかがえるが、分散分析の結果からは5群間に有意な差の傾向 (p<.10) が示されたのみであった。また、「生活安定志向」および「社会的活動志向」は、いずれも40歳代後半以降の平均が最も高かったが、分散分析の結果からは、5群間に有意差は認められなかった。なお、「活動・変化志向」については、分散分析の結果、5群間に0.1%水準で有意な差が認められ、20歳代後半が最も高く、40歳代後半以降で最も低い得点を示し、多重比較の結果においても、20歳代後半の「活動・変化志向」が、30歳代後半および40歳代後半以降よりも1%水準で有意に高く、40歳代前半よりも5%水準で有意に高かった。このことからみて、「活動・変化志向」は加齢に伴って変化し、これから先の人生においてこのような生き方をしたいという志向性は年齢とともに低くなることが明らかになった。

#### (5) 生き方志向性と生き方受容との関連

社会人男性の全データを用いて、「生き方志向性尺度」の5下位尺度と「生き方受容尺度」の4下位尺度の相関係数を求め、表6に示した。

まず、生き方受容の「生き方不信」との関連においては、生き方志向性の「自己成長志向」が0.1%水準で有意な負の相関を示したほか、「活動・変化志向」「社会的活動志向」も1%水準で有意な負の相関を示した。このことから、「能力の活用」「達成」「創造性」「自律性」「ライフスタイル」「責任性」「人間的成長」のほか「学習」を重視した「自己成長志向」, 「多様性」「身体的活動」「危険性」「人間関係」と「趣味やレジャー」を重視した「活動・変化志向」, 「地域社会」に加えて「社会的貢献」「宗教」を重視する「社会的活動志向」という生き方志向性は、こ

表6 生き方志向性と生き方受容の関係 (N=295)

	生き方不信	生き方満足	生き方期待	生き方達成
自己成長志向	-.206***	.291***	.563***	.452***
生活安定志向	-.055	.144*	.289***	.238***
活動・変化志向	-.167**	.309***	.496***	.349***
社会的活動志向	-.167**	.271***	.295***	.363***
職業的評価志向	-.034	.220***	.340***	.387***

\*; p<.05, \*\*; p<.01, \*\*\*; p<.001



れまでの自分の生き方や人生に関する不信感を低くするものと考えられる。あるいは、生き方不信が低いからこそ、このような生き方を志向するのかもしれない。しかしながら、「健康」「ゆとり」「経済的安定性」「老後」に加えて「家庭生活」を重視する「生活安定志向」と、「仕事」と「社会的評価」を重視した「職業的評価志向」は、生き方不信とは関連がないことが示された。

また、生き方受容の「生き方満足」との関連においては、「活動・変化志向」「自己成長志向」の相関が他に比較すると高くなっており、このような生き方志向性が、現在の生き方や人生に関する満足感をもたらすのではないかと考えられるが、「生活安定志向」は5%水準の有意な相関を示したのみにとどまり、「生活安定志向」が生き方満足をもたらす第一義的な要因とはなりにくいことがわかる。

さらに、生き方受容の「生き方期待」との関連でも、やはり「自己成長志向」「活動・変化志向」が他に比較すると高い相関を示し、次いで「職業的評価志向」との相関が高いことからみて、このような生き方志向性は将来の生き方や人生に対する期待感に関連しており、この期待感によって、自己成長や活動・変化を重視した生き方を志向するとも考えられる。

なお、生き方受容の「生き方達成」との関連では、やはり「自己成長志向」が他に比較して最も高い相関を示したが、次いで「職業的評価志向」「社会的活動志向」の順に有意な相関を示していることからみて、このような生き方志向性は、これまでの人生や生き方における達成感や人生の目標達成に対する有能感に関連することが理解される。

以上の点から考察すると、これまでの自分の生き方や人生に関する不信感（生き方不信）、現在の生き方や人生に関する満足感（生き方満足）、将来の生き方や人生に対する期待感（生き方期待）、過去から将来にかけての生き方や人生における達成感（生き方達成）の4側面から構成される生き方受容は、過去・現在・未来という時間的展望の中で体験される生活感情であるだけでなく、これから先の人生においてどのような価値を重視し、どのような活動を行なっていきたいかという将来の生き方志向性にも大きく影響するものと考えられる。さらには、将来の生き方への志向性、とくに自己成長志向が、これまでの生き方や人生に関する不信感（生き方不信）を緩和したり、現在の生き方や人生に対する満足感（生き方満足）のほか、将来の生き方や人生に対する期待感（生き方期待）、過去から将来にかけての生き方や人生における達成感（生き方達成）をもたらすものと理解することができるだろう。

このように生き方受容と生き方志向性の関連から考えると、「生きがい」の問題は、さまざまな生活領域が相互に関連しあって構成されたトータルな「生き方」との関連においてとらえることが必要であると同時に、過去から現在および未来にかけての時間的展望との関連において検討しなければならないと言えよう。したがって、成人期の生き方や生きがいの問題は、白井（2001）のいう、過去を引き受け、未来に立ち向かい、現在を受けとめることができるということ、すなわち、現在の中に未来と過去が統合された「時間的展望のふくらみ」の視点から検討することが重要な課題になると思われる。

付 記

- (1) 本研究は、三川(2002)における社会人男性のデータを再分析したものである。
- (2) 本研究で用いた社会人データは、(株)国際経済労働研究所によって行われる第37回共同意識調査(ONIONⅢ調査)に向けての予備調査データである。このデータの使用については、(株)国際経済労働研究所の了解を得た。

文 献

- 三川俊樹 1990 ライフ・キャリアの視点からみた役割受容 進路指導研究, 11, 10-17.
- 三川俊樹 1991 成人期の危機と自己変容 進路指導研究, 12, 54-61.
- 三川俊樹 2002 生き方志向性の構造と生き方受容の関連 追手門学院大学人間学部紀要, 14, 87-102.
- 白井利明 2001 〈希望〉の心理学——時間的展望をどうもつか 講談社現代新書
- Super, D. E. 1980 A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16, 282-298.

2002年11月20日 受理